にもらし、學校騒動にもらすが如きは、斷じてこれ活氣の洩らし方を誤れるもの也

座談と演說

座談に長じて、演說に短なるものあり。演說に長じて、座談に短なるものあり。されど、いづれかと云へば、演說に長ずる者は、概して座談にも長ずれども、座談は出來ても、演說の出來ざるもの多し。

座談には、聲低くしても可也、澁濁なるも亦可也、抑揚緩急も、さまで心を入れずとも可也。されど、演說は、聲を張りあげざるべからず。聲の高さを要す、大なるを要す、清亮なるを要す。抑揚緩急も、座談よりは一層必要也。要するに、座談と演說とは、聲調の點に於て、先づ相異ならざるを得ず。而して座談の場合は多くして、演說の場合は少なし。座談はよく出來ても、大なる聲を出しつけざれば、座談に差支なる聲調にても、演說には、まづかるべし。四五十遍も、演說すれば、なれて、演說的の聲調を帶ぶるを得べけれども、生來低く小なる聲の人は、演說には不向也。平生演說する機會を得ざる人は、詩吟なり、朗讀なり、謠曲なり、大なる聲を出して、喉を慣らすを要す。

次に內容に就いて言はむに、座談にては、斷片的の思想にても可なれども、演說には、連續せる思想なかるべからず。聲調以外、思想に於て、座談は出來ても演說は出來ざるべし。世故にたけて、經驗多き人は、座談に長ずるに適す。さまで學問なくとも、斷片的思想は得易し。されど、學問あり、見識すぐれたるものならでは演說に適する連續的思想を得ず。連續的思想なきものは、演說に適せず、連續的思想を得むとせば、學問なかるべからず、見識なかるべからず、連續的思想あるものにして、斷片的思想を得るは易し。斷片的思想にすぐれたるものにして、連續的思想を得るは難し。

大は小を兼ぬ。演說に適する聲調、思想を有する人ならば、座談にも長ずべき筈

也。されど、演説に長じて、座談に短なる人あるは何ぞや、演説は、準備する猶豫あり、腹稿あれば可也。されど、座談は、人により、場合により、話の具合により臨機應變の言をなさゞるを得ず。機智を要すると、演説よりも、一層切也。笑つて見たり、怒鳴りつけて見たり、おだてゝ見たり、冷やかして見たり、千變萬化、咄嗟の間に、場合に應じ得る手腕なかるべからず。要するに、機智の有無は、座談の長短のわかるゝ所也。

世に活動せむとするものにして、座談にも、演説にも、長ずれば、これ虎に翼を添ふる也。いづれが、先きかと云へば、前者也。實業家ならば、座談のみにても可なるべけれど、政治家たらむには、座談に長せざるべからざるは言を待たず、かねてまた演説にも長せざるべからず。政治家にして演説の出來ざるは、學問なく、見識なきを自白するに外ならるゞ也。されど、言と行とは、必ずしも相一致せず、演説に長ずればとて、政治家的手腕あるものとも限らず、演説に短なればとて、政治家的手腕なしと限るべきに非ず。たゞ口も八丁、手も八丁、政治家たらむには、手の人にして、かねて口の人なるが都合よき也。

座談にせよ、演説にせよ、能辯、學問、見識、閲歴、常識、機智などの外、人を眼中に置かぬだけの膽力あるを要す。おゞ氣がつけば、廻はる舌もしぶり、活氣もなくなり、言ふべきことも言ふを忘れて、折角の好思想を死なして仕舞ふやうになるべし。この熟練にもよれど、またその人の氣質に由る。おちつきて、度胸するゝ覺悟が肝腎也。

競走の長短

短き距離の競走には、肺は強からずとも、脚も強からずとも、身躰のこなしの矯捷なるもの、勝を制するを得べし。されど、長距離の競走には役立たず。之には肺も強く、脚もつよく、躰せんたいの強さものが勝を制す。

人生は、一種の競走場也。才氣のすぐれたる者は、身躰のこなしの矯捷なるものにて、一時は或は勝を制するとあれども、終には、長き歳月にかけて、こん氣あり、よく刻苦する者に負けるべし。

あせらず、いそがず、熱しすぎず、一時の虚榮を求めず、倦まず、たゆまず、常に悠々として、均一の歩調を取りて進む者は、躰せんたいの強きものにて、終によく大成し大勝す。

われ學生の頃、好んで競走をなしけるが、一百ヤード、二百ヤードの短距離競走には適せざりしかど、四百ヤードぐらゐの短距離が手ごろにして、八百ヤード以上の競走には堪へざりき。されど、競走は言ふに足らず、學校を出でゝ後の事業も、之に類して、十年碌々、何等の成す所もなくして、人後におつること恥かしけれ。

健氣なる雛僧

年若き僧、重き荷物を負ひて、突然、余の草廬を訪ひて曰く、われは、羽後の產なるが、越中の禪寺に養はれ、後、北海道の寺に移れり。以爲へらく、今の世大に佛教を興さむとするものは、大に學ばざるべからず。大に學ばむには、大學に入らざるべからず。大學に入らむには、高等學校を經ざるべからず。北海道にありては學ばむに、その人なし。薪水の勞を執らむに、願くはわれを僕として使ひて、暇々に我に教へて高等學校に入り得るだけの學力をつけさせ給へ。洵に唐突なれど、學生訓を讀みて。先生を慕ひて、遙々都に上れる也。

其容貌を見れば、壯健らしき體格にて、顏は温和にして、何處となく、かはいらしく、所謂慈悲忍辱の相あり。年を問へば、十九歳なりといふ。其學問の經歷を問へば、たゞ尋常小學校を卒業したるのみなりといふ。これ迄、わが廬を訪ひし少年すくなからざれども、未だかばかり愛くるしき人を見ず。われあはれに思ふこと、太だ切也。答へて曰く、高等學校に入らむは、容易の事に非ず。中學校の課程をふ

みて、人並より出來のよき人ならざるべからず。中學校の課程をふまむには、中學校に入らざるべからず。今日、中學校の課程を悉く一人にて敎へ得るものは、恐らくは之なかるべし。一、二の課目ならば、余も敎ふるを得べけれども、自分の修業に忙しく、且つ年が年中著述に追はれ居れば、毎日二三時間を割きて、人に敎ふることは、余の境遇の許さゞる所也。われも學生の頃は、家より學資を得るに由なくて、人の家の玄關番をしたることもあり、自活したることもあり、當時以爲へらく、他日志を得ば、獨身にてくらし、殊勝なる貧書生數名を養ひて、死ぬるまで、書生の境遇をつゞけむと。然るに、ふと誤つて妻を設けぬ。多くの子を擧げぬ。家貧なるに、養ふべき母あり、姉あり、叔母あり、甥あり。當年の素念、今や畵餅に歸しぬ。今、君を養ひ、君に學資を給して、中學に學ばせむことは、余の境遇の許さゞるを如何せむ。今の世、大に學ばむには、大に學資を得ざるべからず。君は何とかして、學資を得るの途なきにや。

僧曰く、高等學校に入らば、學資を乞ふを得べけれども、それまで二三年間、先生の爲めに薪水の勞を執りて、敎授を仰がむとばかり思ひて、都に上れり。今の處學資を得るに由なし。

余曰く、學資なくば、大學に入るに由なきも、學資なしとて、必ずしも學問が出來ざるに非ず。殊に佛敎を興さむ準備の爲めとならば、ひと通り普通學の書を讀み同時に英獨の語學を修めて、西洋哲學の書を讀まば可なるべし。さすれば、大學に入らずとも、自活獨學にて、之をよくするを得べく、中學、高等學校、大學を徑るよりも、準備の年月が、遙に短縮すべし。學資なしとならば、大學に入るの志を翻して、他に修學の途を講じして、如何にや。

僧斷然として曰く、如何に多くの年月を費して、頭に白髮を生ずるも可也。又如何なる苦痛を嘗むるも、余は、大學に入らずんば、止まじ。先生の言によりて、僅々二三年の修業にて、高等學校に入る能はざることを知りぬ。今の力量にては、中

學に入らむことも、覺束なし。これより去りて、佛敎の學校の小使ともなりて、苦學して、ひと通りの學力をつけてのち、來りて先生に見えむ。

ひと夜、わが家にやどりて去りぬ。われその後影を見送りて、何となく涙こぼれぬ。後、數日、さる佛敎の學校の小使となりたる由、端書にて、言ひおこせり。健氣なる小年かな。その志を變ぜずして、其言を實行せば、必ずや、宗敎界の偉人とならむ。かげながら祈る、好在なれや。

奇人

曲りくねつたる樹木は、柱にもならず、器具に用ゐらるゝとも出來ざれとも、庭の植木として眺むべし、社會は、少數の奇人を容るゝの餘裕なかるべからず。

奇人とは、一風かはりたる人にて、一方には非常に發達せる所あれども、また一方には短なる所ありて、圓滿に發達せざる所ある人の謂也。天才ありて、人の意表に出づることをすれば、また常識を缺きて、間の抜けたることをするとあるべし。古來、詩人、學者、美術家などにかゝるため少なからず。

社會に立ち働かむには、實用の材ならざるべからず。然れども、物質を離れたる精神上の事業には、萬古奇人の生存ある也。げにや、天才は狂に近し。餘りに常識がありすぎては、現實をとびはなれて、想像を逞しうする能はず。たゞ尤もらしさことを氣にして、思ひ切つて飄逸なる能はず、奇拔なる能はず、また痛快なる能はず、常識の人は、實用に適して、藝術に適せず、藝術に向ふも、或はひと通りの域には達すべけれど、非凡なる能はず。藝術家とても、全く常識を缺きては不可なれども、常識のみにては、不可也。常識と天才とは、必ずしも兼有するを得ざるものに非ず。

奇人は生るゝ也。奇人と生れたる以上は、宜しく奇人として、其能力を發揮すべし。奇人と生れざるものが、奇人の眞似せむとするは、斷じて不可也。

實用の人

世の中には、英雄、豪傑、聖人、賢人は、餘り多きを要せず、また望みたればとて、無暗に得らるべきものに非ず。たゞ實際望み得べく、また多く無くてはならぬものは、所謂實用の材也。

實用の材とは、社會の各方面に、立派に立ち働くものの謂也。ひと通りの學問見識ありて、事務の才に長じ、物のあはれは、知れども情にもろからず、利害にさとけれども、不義非道なることはせず、意志つよくして、情實に拘制せられず、果斷にして敏活、節儉自から持し、責任を重んじ、事に熱心にして倦まず、己れの事はすべて人に迷惑をかけず、事情の許す限りは、他に對して深切をつくし、以てひとかどの事業をなし得るものは、所謂實用の材にして、國民として先づ立派なる人也豪傑たり、哲人たるを望むこと、固より不可ならざれど、豪傑たらむとして、似面非豪傑となり、たゞ威張つて見たく、着實に事業をなさむとはせずして、徒に虛名を博せむとし、責任を重んぜず、大功は細瑾を顧みずはいふとを、い〳〵口實にして、不倫の行をなし、己を欺き、人を欺きて、得々たるは、余輩のいたく擯斥する所也。哲人たらむとして、生物識りとなり、口ばかりは大きなことを言ひて、實行の力なく、超然自から高ぶりて、世間を馬鹿にし、生きて世に稗益する所なく、放言却つて害毒を流すは、余輩の與せざる所也。

青年事を解せざるの徒、動もすれば曰く、今の教育は、凡人的教育也、宜しく豪傑的教育を施すべしと。豪傑は、もと生るゝもの也。全く教育を以て、之を得べきものに非ず。よしや教育を以て之を得むとするも、吉田松陰の如き豪傑が師となり一藩少數の俊豪をあつむればこそ、久坂玄瑞、高杉晋作のやうな豪傑を得たるなれ松陰の如き偉人は、多く世に出でず。到る處の似而非豪傑が所謂豪傑的教育を施しては、天下の子弟は、たまつたものに非ず。教育するものも、教育せらるゝものも

先づ目標を實用の材に定むべし。それより以上に超脱するは、その人の能力次第也凡人的教育の爲に、凡化する人は、豪傑的教育をうけたればとて、えらくはなれぬ人也。樹木ならばこそ、ゆがめられたるまゝに生長すれ、世上の凡人も、樹木の如く、教育のまゝに化成せらるゝもの多かるべし。されど、天資凡流以上に超脱したるものは、家庭教育、學校教育、社會教育の影響は、幾分かうくれど、必ずや教育以外に、其天資を發揮するを得なき也。

船に殉したる船長

世に忌むべきは、放縱懶惰、もしくは姑息無氣力にして、責任を守らず、職務を忽にするもの也。之に反して、世に尊ぶべきは、責任を重んじて、職に忠なるもの也。殊に其職に殉ずるものに至つては、人間の事業中、最も神聖なるものといふべし。

隊長にして、其職を忽にせむ乎、部下の數百人は、犬死をして、終に全軍の大敗を來たすとあるべし。醫者にして、其職を忽にせむ乎、癒ゆべき病氣も癒えずまだ命のある人も、空しく死亡すべし。船に乘る人が、神とも佛とも頼むは、その船長也。乘組人の生殺與奪は、一にかゝつて、船長の一呼吸にあり。もし船長が誤つて、その粗忽よりして、人一人の命を失ふとも、責任を帶びて、引決する所なかるべからず。これ船長たるものゝ職責也。

明治三十六年十月の末、東海丸は、北日本海を航しけるに、風烈しく、浪あらく密雪、空を掩うて、咫尺を辯せず。あはれや、露船ブロクレス號につきあてられて船躰を損じて、終に沈没せり、船員乘客、すべて九十七人の中、六十人は、漸く露船のボートに救はれたりしが、三十七人は、果敢なくも溺死せり。船長久田佐助氏は、迎へに來りし露船のボートを却け、從容として、身を船にしばりつけ、綱を引きて、高く滊笛を鳴らしつゝ、船と共に、海底に沈没せり。嗚呼壯なる哉。

東海丸が、露西亞の船と衝突したるは、必ずしもその船長の罪に非ず。然れども、その責任を負ひて、船に殉したりしは、これ實に義勇、公に奉ずるものにして、船長たるもの〻龜鑑也。眞の日本男子也。斯く職を重んじて、死を輕んずることは、日本男兒の特性にして、西洋人には、類稀なる所也。露人、之を見て、舌を捲いて驚歎しけるも、宜なる哉。嗚呼、大和魂は、なほ未だ滅せざる也。

決死の軍

もし大なるものが、必ず小なるものにうち勝つものならば、象は獅子に劣る筈なく、支那や、露西亞が、日本にまける筈なし。土地を以てすれば、露西亞は世界第一等の大國也。幾んど日本に四五十倍す。人口を以てすれば、支那が世界第一等の大國也。幾んど日本に十倍す。されど、十年前、支那はもろくも日本に負けたり。今や、露西亞も、日本に對して連戰連敗しつ〻ある也。

個人同士の喧嘩にしても、躰の大なるもの、力の強きもの、角力、擊劍、柔術などの心得あるものが、必ず勝つとは限らず。而して、勝利は常に決死の勇士に歸す戰爭に於けるも亦然り。世、旅順口に於ける閉塞隊を稱して、決死隊といふ。されど、これ他の帝國軍人を侮辱するの嫌なしとせず、閉塞隊は、もとより決死隊也。されと、すべての日本軍隊は、みな決死隊たらずんばあらず。唯それ決死隊也。故に到る處、連戰連勝す。嗚呼、決死の勇士、日清戰爭に連戰連勝せり。今やまた露軍に對して、連戰連勝しつ〻ある也。殊に南山の戰の如きは、世界一般に舌を捲いて驚嘆する所なるべし。南山は實に遼東半島に於ける大要害の地也。露軍は、久しき間、經營して、て〻に砲臺を築き、要塞砲をすゑ、地雷をしかけ、鐵網線を設け一万以上の精鋭を以て、之を死守す。元來、攻むるは難くして、守るは易し。日本在來の戰史をひもときて、堅城の落ちたるためしは少なし。楠正成、僅々數百の兵を以て金剛山を守り、北條氏百万と號する兵を以て之を攻めたるも、終に陷るゝこと

能はざりき。殊に南山の如きは、地せまくして、大兵を用ゐるに由なき處なり。攻者の方にては、少くとも守兵に二十倍せる兵力を以て、長き時日にかけて攻むるに非ずんば、之を拔く能はざるべき筈也。然るに、我日本兵は敵よりは優勢なるも、十倍とまでは多からず。而して僅かに一日間にて之を拔きたり。もし地をかへて、我守り、露攻めなば、到底兵力のみにては、拔くと能はざるべき也。もしや非常に優勢なる兵を以て攻むれば、或は拔けざるにあらざるも、數月間はかゝるべき也。

嗚呼、日本軍は、かゝる天險の地を、一呼して拔きたり。怪む莫れ、其代りに四千人近くの死傷者を出したる也。一隊悉く斃るゝも、毫も屈せず、入代り入代り突貫して、終に之れを拔きたる也。その死傷者の多きは、自から期せし所、これ世界中、日本の兵ならでは、出來ぬわざなるべし。死なる哉、死を決したる者の前には、堅城なく、利砲なく、大兵もなし。成るべく兵を損せずして、勝を制せよとは今の戰術の敎ふる所、もし日本にして、この敎に盲從すれば、或は露國に勝つことは困難なるべし。死を決して勝ふ所に、奇功あり、日本兵の生命あり。露國が數十百万の軍を滿洲におくり來るとも、毫も恐るゝに足らざる也。

日本にては、古來、場合によりては、死ぬることを一大光榮とせり。刀折れ、矢つきて降るは、西洋にては普通の事とし、かゝる場合に、降るを耻とせず。日本にては、之に反す、彼の金州丸事件の如きも、降るは普通の事なるも、なほ軍人の大部分は、いさぎよく討死せり。あゝこれ日本人の特性也、日本兵の連戰連勝する所以也。

國民の健康法

健康は、個人にとりても幸福なるのみならず、社會によりても、幸福也。事業はすべて健康の生むところ也。病の生めるものとては、不平あるのみ、愚痴あるのみ一種病的の文學あるのみ。

日本人は、概して病身なるやう也。之が救濟策を個人の自省にのみゆだぬれば、結果のあらはれむこと、おそかるべし。社會の風習組織が、自然に人をして健康を重んぜしむることを、目下の急務となす。

まづ日本にて美人ともてはやさるものは、多くは病的也。胸ゆたかに、腰ふときをきらひて、女は誰もやせたがるは、間違つた話し也。もとより大道臼のやうなのが美にはあらねど、肉のかたく張りきりて、色澤よく、即ち健康なる身體に、美あるぞかし。妻を娶るもの、まづ器量を問ひ、教育を問ひ、氣象を問ひ、持參金を問ひ、時に病を問ふも、肺病、癲病の血統ありや否やを問ふのみにして、必ずしも本人の健康を問はざるやうなるか、余以爲へらく、第一に問ふべきは健康也。女子の第一につとむべきは、身體の健康也。學問技能は第二の問題也。女の男に嫁するも地位を問ひ、所得を問ひて、健康を問はず。折角富豪に嫁するも、夫、病身ならば幸福はなかるべし。地位高き人を夫とするも、早く死なれては、面白からざるべし

この頃留學を命ずるもの〻健康を檢査するやうになりたるは、至極結構なる事也教員を採用するにも、社員を雇ふにも、官吏を登用するにも、之をおし及し、而かも必ずしも繩墨に拘泥せざるやうにならば、國民一般に自省して、健康を重んずるやうにならむ乎。今や醫學益々進んで病者益多し。蓋し醫者はたゞ病を治するの術を講じして病を豫防するの法を講せず。病を豫防するの法は、金を得るに緣遠ければ、醫者自らか進んで之をなすもの少なし。政府よろしく保護を加へて、衞生學者を多く出すべき也。

海外の觀念

人口は增せども、國士は增さず。供給多くなりて、需要少なし。大學を卒業したるものが、社會に出で〻直によき地位を得たりしは、むかしの事也。今は、大學を卒業しても、賣れ口なきに困るものあり。今後は益甚しかるべし。

今後の青年は、氣位ばかり高くせずに、將來有望なる處を擇びて、暫し甘んじて低き地位につきて、辛抱する覺悟なかるべからず。たゞ暫し甘んずる也、全く心まで甘んぜずに、研究と修養とをつまば、能力次第にて、漸々飛躍するを得べし。

されど、日本だけは、高の知れたる孤島也。歐洲には、生業を得るの途乏しけれど、亞米利加は、なほ日本人を容れて餘りあり。對岸の支那や韓國には、日本人が生業を得るの途多かるべし。戰爭して勝ちさへすれば、よしといふわけに非ず。日本の國勢をその土地に扶植せむには、日本人多く往いて入り込まざるべからず。韓國にある日本人、あはせて、二万人に過ぎずと聞く。これ位の事にては、日本の勢力は、韓國に普及すべくもあらず。支那は更に大也、日本人が數百萬人入り込みたりとも、優に生業の途あるべし。

今後の青年は、日本人の常癖なる思郷病にかゝらざらむことを要す。區々たる五小洲内に局促せずして、海外に飛躍するの心掛なかるべからず。それにつけても、まづつとむべきは、語學の練習也。一の外國語に精通して、高尚なる書物を讀みうるだけの力量を得むとは、容易にあらざれども、會話の出來得るだけならば、さまでむづかしからず。日本今日の青年が、普通學を修むるかたはら、英語、支那語に通じて、ひと通りの會話が出來るぐらゐの事は、きはめて容易なるべし。又一方には、手足まとひの係累をつくらざる覺悟をなすべし。老親ありて、他に兄弟なきものは、遠征するに由なかるべけれども、青年の士が、早くも甘美なる家庭を夢みて夫となり、親とならむとするに急なるは、餘りに姑息也、無氣力也、丈夫天下志、四十未レ成レ家と古人も歌ひげむ、四五十歳になりて、はじめて家をなすも、未だ遲しとはせざる也。

近時、青年の士の唯一の目的は、試驗の合格にあるが如し。高等文官、醫師、代言人、中等教員などの試驗の門には、潮の如くつめよす。試驗は、彼等の生命也。憐れむべき哉、彼等は、試驗の爲めに世に生れたるが如し。而かも俊才の士はまれ

也。首尾よく合格するもの少なくして、不合格なるもの多し。數回うけて合格する能はず、終に無免許にて、醫師となるものあり。代言人となるものあり。うけに受けて、合格する能はずして、發狂するものあり。近頃、新聞紙の傳ふる所にまよれば、醫學を修めたる老書生あり。免許試驗をうけて合格する能はず、卑屈破廉耻にも、文相にお慈悲に合格させてくれよと哀願し、終に凶器を携へて大磯の伊藤侯の別莊の門前をうろつきて、怪しまれて取りおさへられたりとぞ。試驗の弊害茲に至れる乎。こゝまでに至るものは少なかるべけれども、合格する能はざる醫學生は、頗る多し。區々たる試驗にうき身やつして、壯年をむなしく過さずとも、何ぞ思ひ切つて、支那や韓國に飛び出すの策を講せざる。支那韓國は、醫術に於て、もと我國の師なりしかど、文明開化のあとじさり、今は極めて醫術の開けざる所也。醫術も何も知らぬものが、單に藥をうり歩きても、相當に需要ありとぞ。少し醫術を解するものが行けば、生業の途を得易きのみならず、彼の國の人にとりても此上もなき恩惠也。

東洋にては、日本のみ、世界の强國の中に入りて、韓國や、支那や、幾んど滅亡に瀕せむとす。日本の志士、豈に往いて救はざるべけむや。韓國の如き小國はまた如何ともするなきも、支那は、國大にして富めり。教育の法、その宜しきを得ば、國を强くするの途なしとせず。よしや、下りて、滅亡すとも、其土地は滅せず、日本人が多く入り込みて、勢力を扶植すれば、これ日本國の膨脹せる也。今日語學と云へば、西洋語の事になりて、一衣帶水を隔てたる隣國の語を學ばむとするもの少なく、小島國内にみな局促して、試驗の門前にゆきつまりて、空しく老いむとするもの多きは、豈に慨嘆せざるべけむや。

家庭と學生 終

明治三十八年六月十[illegible]日印刷
明治三十八年六月十[illegible]日發行

家庭と學生奥付
定價金參拾八錢
郵稅金六錢

複製不許

著者 東京府下淀橋町柏木九百十一番地 大町桂月
發行所 東京市本郷區元富士町二番地 日高藤兵衛
印刷者 東京市京橋區卅間堀二丁目一番地 久米川治三郎
印刷所 東京市京橋區卅間堀二丁目一番地 明教社
發行所 東京市本郷區元富士町二番地 日高有隣堂

2-205

大賣捌

東京市京橋區尾張町
東京神田區表神保町
東京神田區裏神保町
東京日本橋區箔屋町
東京京橋區南傳馬町
東京神田區表神保町
大阪心齋橋南久太郎町
大阪南本町座摩ノ前
大阪備後町四丁目
京都三條寺町
京都二條寺町
甲府市柳町壹丁目
甲府常盤町
水戸泉町
野州足利町一丁目
廣島市
岡山市岡山町
周防國岩國町
山口大市町
高知市稲崎町
熊本市新町二丁目

警醒社
東京堂
上田屋
前川
目黒書店
修學堂
福音社
杉本書店
吉岡平助
聖書房
若林書店
大塚柳正堂
阪本温故堂
川又銀藏
青木書店
積善館
奥田金昌堂
白金日新堂
同支店
澤本書店
長崎次郎

鹿兒島市松山通り仲町
筑後久留米市
靜岡市
横濱市
同
前橋市曲輪町
越後國水原
新潟古町
越後長岡
金澤市片町
高岡市守山町
福井市佐桂枝中町
信州長野市大門町
信州松本本町
信州諏訪町
仙臺市新傳馬町
仙臺市大町五丁目
陸中一ノ關町
陸奥弘前市士手町
青森市米町
秋田市茶町
北海道札幌區南一條西二丁目

久永新藏
菊竹書店
吉見書店
弘集堂
勉强堂
煥乎堂書店
西村六平
西村支店
覺張次平
宇都宮書店
學海堂書店
品川書店
西澤喜太郎
松榮堂
日進堂
紀港堂
藤崎書店
佐藤喜年
今泉道太郎
同支店
成見清兵衛
富貴堂

98
140

203526-000-5

98-140

家庭と学生

大町　桂月／著

M38
EDM-0033